

各地に広がるシャッター商店街は今や衰退・日本を象徴する風景だ。しかし約60年前に全国で初めてアーケードの名を冠した静岡県沼津市の「名店街」には不思議な空き店舗がほとんどない。市の外郭団体が産業振興を手掛けている深沢公詞(60)が商店街の再建に乗り出したのは2004年。空き店舗が目立つのに「若くてやる気のある

二度目の奇跡

第1部 私は45歳 四

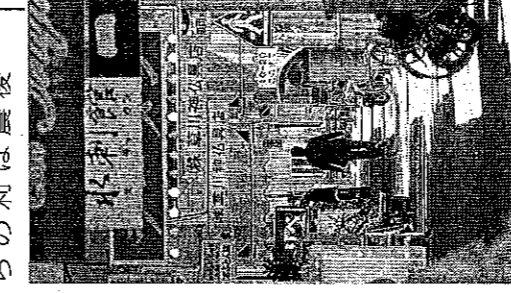
その後、地元有志と地権者が話し合いを重ね、家賃は下がり、若者の入居も増えた。09年4月には全国で初めて地権者だけが会社を共同設立。新会社が商店街全体のリノベを手配する。所有と利用を分離し、街全体の価値を引き上げる再開発にも踏み込む。高齢化などシャッター

商店街が広がる理由は単に人手不足ではない。だが、何も担い手が高齢化し、後継者不足に直面する農業。これも規制などはあるのも見逃さない。利用よりも所有に有利だ。その結果が埼玉県の店舗を他人に貸したりすると、将来の転売などを

都合なのだ。担い手が高齢化し、後継者不足に直面する農業。これも規制などはあるのも見逃さない。利用よりも所有に有利だ。その結果が埼玉県の店舗を他人に貸したりすると、将来の転売などを

「遺産」生かし未踏の域へ

ドラッカーの予言



建築物が老朽化するなか、再開発に向けた話し合いが続く「アーケード名店街」(静岡県沼津市)

ドラッカーはこう書いた。若い事業を餓死させる危険がある」とした。ドラッカーの警告は、平均年齢45歳の今の日本にそのまま当てはまる。中高年の利害が優先されるシルバ「民主主義」の構図は当面、変わることはしない。60歳以上が総人口に占める割合は約3

割だが、09年衆院選の投票率に占める比率で見ると、約41%に跳ね上がる。富の食いつぶし「財産目録をつくるほしい」。親にその要求するふきこりの青年がいる。本来は働いて税金を納めるべき人が親の世代の重圧に耐える。日本は今ある富を食いつぶすだけになりかねない。跡は難しいが、不可能ではない。(敬称略)

明治維新、戦後の高度成長の2度の奇跡は、旧秩序の否定があったからこそ達成された。それは西欧列強の圧力に伴う幕府体制の崩壊であり、第一次大戦の敗戦だった。だが、今の日本で戦争や革命、戦後のパージのような強制的な世代交代に期待をかけるのは現実的とはいえない。民主主義の手続きを守りながら既得権に風穴を開け、かつての成長の遺産を経済の活性化に生かす。それが経済学者ケインズが「アニマルスピリット」と呼んだ資本主義のダイナミズムを取り戻す道だ。支え手一人ひとりが未踏の領域にどう挑むか。「二度目の奇跡」は難しいが、不可能ではない。(敬称略)

「関連記事3面に(第1部おわり)」

取材班は吉沢浩志、大西豊之、八木谷勝美、吉野直也、森安健、大越隆洋、大岩佐和子、柳沢徳道、岸村高信、田中晴人、中原敏太郎、小林健、豊田健一郎、本田幸久、栗原健太、安西明秀、浜葉佐博らで構成しました。

Web刊

日本は明治維新、戦後復興に続く「二度目の奇跡」を実現できるか。電子版で実施中のアンケート3回目は「今の日本に誇りを持てますか」。ご意見も募集中です。

相互提供協定(AOS)は3回きりという縛りがある。日米ACは、韓国側は朝鮮半島有の秘密情報を交換する際、一連の挑発は「許し難い会談し、韓国側部のナシ」(関連記事7面)で、経産相は2回開関係